

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011 年 1 月 31 日

派遣者氏名（専門分野）	重田 謙（哲学）
-------------	----------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	米国の言語・分析哲学におけるウィトゲンシュタイン哲学再生の可能性 Possibility of the Renaissance of Wittgenstein in Philosophy of Language and Analytical Philosophy in USA
-------	---

派遣期間

2010 年 4 月 1 日 ～ 2010 年 11 月 30 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	アメリカ合衆国	ニューヨーク	ニューヨーク大学 (NYU)	ポール・ホーウィッチ教授

派遣先で実施した研究内容

[研究内容の概要] 自然主義的、实在論的、経験主義的な傾向のきわめて強い米国の言語・分析哲学の領野において（この分野においては、米国の哲学がつねに新しい問題系とそれをめぐる諸理論を産出し続けているという意味において尖端的であることはたしかである）、特に意味についてのウィトゲンシュタインの洞察の核心は正当に評価・受容されていないように思われる。自分が考えるウィトゲンシュタイン哲学の可能性を、米国における哲学の最先端の議論を経由した視点から批判的に吟味するというのが、今回の派遣研究の大局的な目的である。

1. P. ホーウィッチとの討議：受入研究者である P. ホーウィッチは、現在の米国における趨勢に抵抗しながらウィトゲンシュタイン哲学の可能性を最も正当に継承したうえでそれを独自に展開すべく奮闘している数少ない研究者の一人である。彼と、特に下記のテーマについて定期的（週 1 回）に討議をおこなった。

a. ホーウィッチが提唱する意味の使用理論の検討。意味の使用理論とは、ウィトゲンシュタインの意味論を援用しながら彼が独自に展開している理論である。その理論の内実を正確に把握すること、および私がウィトゲンシュタイン哲学から抽出する意味論と彼の理論との相違はどの点に存するのかを明らかにすることが主たる目的である。この討議で特に検討の対象となったのは、Horwich, Paul, 'Kripke's Paradox of Meaning', 'Ungrounded Reason' in *Truth-Meaning-Reality*, Oxford UP, 2010, 'Meaning as Use' in *Meaning*, Oxford UP, 1998, 'Kripke's Wittgenstein' (forthcoming) などである。

b. アプリオリティについての見解の検討。ウィトゲンシュタインの意味論を適用した場合、ア・プリオリな知識とア・ポステリオリな知識との区別は可能なのか、もし可能だとしたらいかにしてか、という問いに対する回答を探る。この討議で特に検討の対象となったのは、Horwich Paul, 'Implicit Definition, Analytic Truth, and Apriori Knowledge,' *Noûs* 31, 2000, 'Stipulation, Meaning, and Apriority,' in Boghossian, Paul and Peacocke, C (eds.), *New Essays on the A Priori*, Oxford: Oxford UP, 2000 などである。

2. 米国における最新の言語哲学研究の動向の調査およびそこにおける自らの研究の位置づけ
大学院のゼミナール・講義のうち自らの研究と密接に関連するものを精選して出席し、討議に参加した。出席した主要な講義とゼミナールは James Pryor, *Topics in Epistemology; The Relation between Traditional*

Epistemic Notions and Their Formal Counterparts, Stephen Schiffer, Foundational Issues in the Theory of Meaning, Crispin Wright, Philosophy of Mathematics; Abstractionist Foundations for Classical Mathematical Theories, Hartry Field, Classical Logic and Non-classical Logic, James Pryor/Chris Barker, Philosophy of Language; Lambda Seminar, Derek Parfit, Ethics Selected Topics from his *On What Matters* (forthcoming), Peter Unger, Advanced Introduction to Metaphysics, Ted Sider/David Chalmers, Research Seminar on Mind and Language; Grounds of Intentionality である。特に最後に言及したゼミナールでは、「なにによって言語的表現はそれがもつ当の内容をもつことができるのか」という問について、NYU 外から毎週米国有数の研究者 (Ruth Millican, Robert Brandom, Saul Kripke, Robert Stalnaker, Jason Stanley, etc) が招へいされ、その理論に関する討議が行われた。それは自分の意味論の位置づけと今後の研究の指針を明確にするためにきわめて有益であった。

3. アプリオリティについての論文の執筆；特に上記 b にもとづいて、ア・プリオリな知識は可能であるのか、という問について英語論文 (‘The Apriori and Aposteriori in Context’) を執筆し、それについてホーウィッチと討議をおこなった。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

1. 意味のデフレーションナリー理論の構想：上記の研究過程を通じて、自分の考える、意味についてのウィトゲンシュタインの議論の核心は、だれにも共有されておらず、また自分の見解に致命的な欠陥が含まれていないという確信を得た。そして、意味に関する新しい理論 (ウィトゲンシュタイン哲学に基づく意味のデフレーションナリー理論 (Deflationary Theory of Meaning)) を提唱し、それに基づいて、現代の言語哲学における意味についての諸理論を、記述的意味論－メタ意味論 (後者は形而上学的意味論と経験主義的意味論に下位区分される) という新しい観点のもとに再編成するという展望を開くことができた。

2. ア・プリオリな知識とア・ポステリオリな知識についての新しい展望：上記 3 で言及した論文 (‘The Apriori and Aposteriori in Context’) の執筆を通じて次の点を明らかにできた。①ウィトゲンシュタインの意味論を適用するとき、ア・プリオリな知識とア・ポステリオリな知識を本質的に峻別することは不可能となる、②ア・プリオリな知識が不可能であるというクワインの主張 (特に“Two Dogmas of Empiricism”) はジレンマに逢着する、③ウィトゲンシュタインの観点からは、②のジレンマを回避できるが、あらゆる知識はある特定の意味においてすべてア・プリオリであり本質的に区別することができないという別の困難に直面する、④文脈に依存する新しい規準を導入すればその困難を回避できる。

3. ホーウィッチの意味の使用理論の問題点の解明：彼との直接の討議を通じて、意味の使用理論は形而上学的な (不可能な) 意味論としても、経験主義的な (可能な) メタ意味論としても解釈できる両義性にその特質があることに想到した。一方、自分がウィトゲンシュタインから抽出する意味論は、前者を批判し、また後者とは両立可能であるが、それとは独立であるという特質をもっている。

派遣後の研究発表の予定

1. 上記 2 の論文 ‘The Apriori and Aposteriori in Context’ については、ホーウィッチから提示された批判および疑問に回答するために、現在必要な修正を施しているところである。その作業が完了したら、アメリカの雑誌 (*Noûs*) に投稿する予定である (投稿先の雑誌は変更の可能性あり)。

2. 上記 3 については、その成果を第 13 回北米ウィトゲンシュタイン協会 (2012) において発表し、それをふまえて欧文論文としてまとめ国際雑誌に投稿する予定である。